ケース 1

キリスト教理念に基づく中高一貫・男女共学の私立学校、いわゆるミッションスクールの高等部の英語教師としてあなたが働き始めてから、9 年になる。中堅職員となり、現在受け持っている子どもたちが卒業する今年、職員室のあなたの机の引き出しの奥に「辞表」が忍ばせてあるのを、ひとりを除く同僚たちはまだ知らない。

ここに至るまでの道のりは平坦ではなかった。

小学 3 年生のとき、あなたの両親は離婚した。「脱サラ」して開いたパソコン教室の事業が失敗し、借金を背負った父が翌年「失踪」しのだ。両親は決して憎み合っていたわけではないが、世間からの冷たい目、住宅の差し押さえなど、「失敗者を犯罪者かのように扱う日本社会」に、家族で立ち向かう強さを若かった当時の両親はまだ兼ね備えていなかったのだろう。母は父のことを一度も悪く言ったことがない。それでも子どもの頃は父を恨んだが、父を責める気持ちは今はない。父はあなたと母を守るために自分たちの元を去ってくれたのだと、大人になり結婚した今は父の気持ちがよく分かる。どうか幸せであってほしい。

あなたは母親の旧姓に苗字が変わり、首都圏から母親の故郷の神戸に引っ越した。学校で標準語をバカにされる日々を救ってくれたのは、祖父母と担任の M 先生の存在だった。細やかにあなたを気遣うとともに親身に叱ってくれ、小学校卒業後も気にかけ続けてくれた M 先生を、あなたは父親代わりのように慕っていた。今でも彼はあなたの人生のヒーローのひとりだ。彼がクリスチャンだと知ったのはあなたが大阪の大学の教育学部に入った年の夏休みの同窓会でのことだった。「自分もキリスト教について知りたい」と言うと、M 先生はキリスト者学生会（KGK）について教えてくれた。2 年生のときに洗礼を受け、3 年生のときに全国キャンプで現在の妻に出会った。希望就職先はミッション系の学校と決めていた。人生を変えてくれたキリスト教の理念の下で教育に携わりたかったし、M 先生が自分にしてくれたように困難を抱える生徒の力になりたいと考えたからだ。

大学時代から付き合ってきた妻とは 2 年前に結婚し、この夏に一人目の子どもが生まれる。担任を受け持った生徒たちからの「結婚おめでとう」の寄せ書きと披露宴でのサプライズビデオは、結婚式の泣く定番とされる「両親への手紙のコーナー」以上に感動し、不覚にも号泣してしまった。自分の天職は教師だと確信するほどに英語を教える事は好きだし生徒たちは可愛い。卒業生からたまに連絡が来るとその成長に目を見張り、その日一日、幸せな気持ちになる。しかし、「ある事件」をきっかけに、あなたはこの先教師として働いていく自信と情熱を失ってしまった。

それは 5 年前に起きた。

あなたは当時 2 年生の担任を受け持っていたが、3 年生のクラスでいじめが起きた。ベテランの担任教師はクラス運営には定評があったが、SNS と学校裏サイトで起きた陰湿で巧妙ないじめに気づくのが遅れ、対応が遅きに失し、最悪の事態が起きた。いじめられた女生

徒が遺書を残して自殺したのだ。緊急職員会議が何度も開かれた。職員会議で知り得たことを、あなたはまだ妻にすら話せていない。いじめの主犯格の生徒の父親は地元で有名な実業家で市議会にも顔が利き、学校に多額の寄付もしていた。彼女が推薦入試に合格したのは父親の寄付のおかげだというのは公然の秘密だ。この生徒の名前が自殺した生徒の遺書に書かれていたことが大問題となった。

職員会議で「理事会の方針」として、この遺書の存在自体を「なかったこと」にする決定が教頭から発表された。さらには「いじめの存在」そのものを、親族であっても学外者には口外しないように、という箝口令が敷かれた。被害者の両親は当然抗議したが、理事長と直接面談した後、嘘のように抗議は立ち消えた。何らかの「取引」があったのではと勘ぐる職員も多い。被害者の生徒には学内に妹と弟がいる。時が経つと世間的にはこの「事件」は「以前から心療内科に通っていた生徒が思い詰めて自死した」という話しになっていた。学校裏サイトや SNS 界隈では真相を知る生徒たちとその保護者とおぼしき大人が正義感から書き込みを続けていたが、次第にそういう行動が自分たちの大学入試の推薦に響く、という噂を呼ぶようになると、今度は「真実の書き込み」をしていた当事者たちから率先して「いじめはなかったという真実」を広める媒介者となった。彼らは自警団のように、「いじめという陰謀論」を広める者たちを「監視と糾弾の対象」として活動するようになり、当初の動きは嘘のように鎮火された。手のひら返しにあなたは呆れ、虚しくなったが「子どもを守るという絶対正義」のもとに、保護者たちは一貫して行動していたのだと思うようになった。実際、一昨年の冬にいじめと自殺が起き、連日それをワイドショーで報じられた関東の私立高校は翌年受験者が激減し、有名大学進学率も落ち、「学校としてのランク」は確実に落ちた。シニカルに考えれば自分自身も「自らの社会的地位を守る」ために、消極的にではあっても隠蔽に加担したひとりであることに間違いはない。彼らを批判する権利などないのだ。「隠蔽」に一貫して反対だった担任のベテラン教師も、泣く泣く学校の方針に従って事後対応に奔走した。彼はその後、心労でうつ病を発症し入院・休職し、2 年後に自主退職した。あなたはこの教師を人間としても同業者としても尊敬していた。一度だけ病院に見舞ったときに彼は「もう教師としてやっていく自信がないし、私にはその資格もない。回復したら何かまったく違う仕事を探すよ」とこぼした。辛くて、悔しそうだった。

時を同じくしてあなたの救いになっていたのは、所属する教会で NPO 法人として始まった「チャーチスクール」での週末のボランティアだった。校長（理事長）は主任牧師で、教会スタッフと子どもたちの親がパートタイムで働くことで運営されていた。アメリカでは 160 万人の子どもたちが、クリスチャンの親たちによって自宅で育てられ、有名大学にも大勢進学しているということを初めて知った。アメリカのホームスクーリング団体が提供している教材を邦訳したカリキュラムに関し、あなたは職業教師の視点からの助言を求められた。教材はプロの目から見てもとても良く出来ていた。日本的な文脈を考えて多少の微調整は必要だが、文科省が推進する学習指導要領に対するあなたの日頃からの不満や違和感を解消してくれるような内容だった。年に何度か週末に「イングリッシュサタデー」という

イベントがあり、あなたはその講師としてボランティアをした。勤め先とは違い授業は祈りで始まり、不登校だった 4 名を含む 10 名の子どもたちの目は学ぶ喜びに輝いていた。職場ではしばらく感じていなかった「教師であることの喜び」を久しぶりに思い出した。

次の月曜日に出勤するときはかつてなく身も心も重かった。「あの事件」を境に職員室の雰囲気は変わった。お金や人事をめぐるガバナンス（運営）に不透明なところがあることがあの事件のあとで顕在化し、全職員の知るところとなった。数年前に理事長の任期に関する定款条項が変更されたのがターニングポイントで、それに反対していた「反理事長派」の理事たちは解任されたという。「学校の私物化」だと憤る職員もいるが、末端の自分に何が出来るわけでもない。「理事長の寵愛と庇護」を受けた 50 代以上の古株職員たちは部活顧問など面倒な仕事を回避し定時で帰り、業務負担は 40 代以下の中堅と若手職員に集中する。それでなくても厳しい労働環境の教育現場で、激務と心労のため心を病み休職する職員は常時 1～2 名おり、若手職員たちはそれを横目に栄養ドリンクを飲みながら疲れた身体に鞭打ち「次は自分の番か」と戦々恐々としている。現場運営は「理事長派」でますます固められ、風通しは悪くなっていった。かの事件をもみ消す中心的役割を果たした当時の教頭は異例の出世をし、退職後は理事のひとりになると言われている。

この学校の理念は「光のうちに歩む人間」である。ヨハネ 3 章 21 節からとられたこの「光」という言葉は、その行動が公明正大であるという意味でもある。「この学校のどこが光なのだろう？」という皮肉をこぼしたくなる。

同期の体育教師 K はあなたとは違う教会に行っているが、職員の 1 割ぐらいいるクリスチャン職員のひとりで、あなたにとっては「戦友」だ。このような本音と愚痴を、彼とときおり職場外で話すときにだけさらけ出すことが出来る。1 年前から、仕事を辞めようと思っていることを彼だけには話してきた。彼は反対も賛同もせず、黙って聞いてくれた。「お前がどちらを選んでも応援するし、祈っているよ。」とだけ彼は言った。「ただ、事件のことを奥さんに言って、ちゃんと相談してからにしろよ」とだけは忠告された。退職の後の身の振り方は、チャーチスクールの薄給では家族を養えないので、塾講師のアルバイトか何かとかけもちで仕事をしつつ、そちらの発展に貢献できたらという願いがある。

近々妻にすべてを打ち明け、今年度中には他県で教頭をしている恩師の M 先生にも相談に行こうと思っている。何よりも、神はこのことに関し、どう導いておられるのか？占いのように分かりやすく「こっちだよ」と言ってくれるような存在がいたらいいのにと思うが、「天からの声」は聞こえない。『夜と霧』を書いたヴィクトール・フランクルは、「私たちは人生に意味を問うのではなく、人生から問われているのだ」と言っている。自分は今きっと、神に問うているのではなく、神から問われているのだろう。

「あなたはどう生きるのか？」

設問１．この主人公の行動について、批判的に議論してください。
設問２．この主人公はこの後どう行動すべきなのか議論してください。